

目次

はじめに 鷺田清一

第一章

大学はジャングル

大学の本来の使命とは／おもろい研究だからこそ価値がある／ゴリラから学ぶリーダーシップ／松下幸之助のリーダーシップはゴリラそのもの／負けない論理／ネット社会のコミュニケーション／京都に仕出し屋と和菓子屋がある理由

11

第二章

老いと成熟を京都に学ぶ

老化に関する山極仮説／老いと成熟と未熟／貧困と格差が変えた成熟社会／グローバリゼーションが破壊したコミュニティの根っこ／成熟の街、京都に根づくしきたり／雑巾に漂う気品／京都のように成熟した老い

39

7

第三章

家と家族の進化を考える

樹上から地上へ、最初の家づくり／核家族のための新しい住まい／命の世話を一緒に
行う／明治維新以降、プロ化を突き進めた日本／「許せない子ども」を生んだ資本主
義／人間がつくった最古のフィクション「家族」／性を隠して、食を公開した人間

第四章

アートと言葉の起源を探る

人は表現する生き物／芸術の起源は共感性／アートとセンサー、微分回路と積分回
路／仮説検証型と現場発見型／積み重ねたものを一度チャラにする／アートの語源は
ラテン語の「アルス」／生きる力としてのアート／言葉が生まれたとき／人間の体には
ホメオスタシスが働いている

第五章

自由の根源とテリトリー

生後九カ月から始まる他者への同調／三次元空間では声でテリトリーを主張／テリト
リーの起源と男権社会の誕生／ひとりで暮らすことを選ばなかったメス／自由と自己
責任をめぐる問題

第六章

ファッションに秘められた意味

ストーリーとしての服装／自由のシンボルだった制服／装いの起源は宇宙との対話／
憑依と女性の所有／禁止が見えなくなった社会

143

第七章

食の変化から社会の変化を読む

食に見る所有と共有の起源／所有と共有をリセットした近代革命／食と性をめぐる欲望と禁忌／プライベートとパブリックの逆転／誕生と死に付随する儀式

161

第八章

教養の本質とは何か

臨床哲学を捉え直す／科学者は知者ではなく賢者に／一緒に考えてくれる人／水平方向の家事型教養／直観力を鍛える／「学者馬鹿」が社会の危機を救う

175

第九章

AI時代の身体性

科学者の矜持／気前よく解き放つ／教育は投資なのか／才能の育成と評価／英語化、国際化にモノ申す／人間のセンサーは衰えているのか

おわりに 山極寿一

はじめに

山極さんと親しくお話をするようになって、かれこれ四半世紀になる。学生時代にはたぶん六、七年おなじキャンパスにいたはずだが、出会うことはなかった。そのころは部室のある西部構内と、読書会をする喫茶店や友人の下宿と、哲学科の閲覧室と、映画館とバイト先とがわたしが一日の大半を過ごす場所だったから、そもそも出会うはずもなかった。これまでのたがいの足跡はある意味、対照的である。いってみれば、山極さんは京都にやってきた人、わたしは京都を離れた者である。東京生まれの彼は京都大学の研究に憧れ、一〇代で京都にやってきた後、アフリカ、愛知、そして京都と活動の場を移す。わたしは、京都で学んだ後、京都を離れ、大阪と東京を主たる仕事の場とし、その間にしばらくドイツでも研究生生活を送った。

いずれも主たる活動の場が生まれたのとは異なる場所だったので、出身地への過剰な思

い入れは二人ともない。一方、霊長類学と哲学、ともに国境とか、文理の壁なんぞに怯むひるような学問ではないし、人類史どころか自然史にまで手をつ突っ込んできた学問だから、なんのとらわれもないおしゃべりができる。

その山極さんとはじめてお目にかかったのはどんな集まりであつたか、じつはよく憶えていない。だがそのあとは、こちらからこの研究会のメンバーになつてくださいと、再三お願いし、いつも快く引き受けてくださった。おたがい、まだ自由な時間がたっぷりあつたところである。とくにわたしが研究代表を務めた国際高等研究所の「センサー論」研究会、屋久島で合宿もしたサントリー不易流行研究所の「成熟社会のライフスタイル」研究会、さらに京都府の文化力創造懇話会など、それぞれに長く続いた研究会や委員会で、山極さんはなくてはならないメンバーだった。

その理由の一つ。わたしなどのような「人間」研究者には、これは人間に固有のものと、勝手に思い込んでいることが多すぎるからだ。だからその視野の狭さを正すために、およそ七〇〇万年前に別の進化へと枝分かれしていった類人猿の集団生活のありようを研究してきた彼に、いちいち意見を聞かせてもらいたかつた。だれからどんなテーゼが提示されても、いったん山極さんに「ゴリラの場合はどうですか？」と訊ねた。そしてそのつど強

い衝撃を受けたり、ぐっと考え込んだりするのだった。

かつてわたしは、山極さんの文庫本の解説を書く機会に恵まれ、そのとき山極さんの仕事をこんなふうに評させてもらった。「ごつい思想、密な調査、深い知恵」と。

限られた観察時間でデータをとり、論文を量産し、書いた後はその動物に関心を失う「小回りのきく賢い学者」になるより、「対象にずっと感動と愛着をもち続ける動物学者になりたい」と思ってきたという山極さんは、自然史から人類の制度史まで、研究の射程距離がとてつもなく大きい。

そのためのフィールド調査では、来る日も来る日もゴリラの糞を計量し、水洗いしてから、新聞紙の上に拡げ、竹べらでかき分け内容物を分析するという「糞分析」を四年間、さらにゴリラの一集団を二年間ひたすら追跡し、その間に調査した巣は三四七五。そんな地道な調査にさらに緻密な推論を重ねてきた。

そして類人猿を「人類の過去を探る辞書のひとつ」とし、その研究から導き出される深い叡智。わたしたち人類が繰り返してきた衝突の悲しい歴史を〈共存〉の途へと切り換えるには、その類人猿が見つけた方策から多くを学ぶ必要があるとし、「われわれ人類はけっして最善の方法で自然と接してきたわけではない」と語る。

そんな山極さんとの対話のなかで、たとえば人類を「ケアする動物」と規定できないかという提案、生きものの〈内〉と〈外〉についての考え方、「しんがりの思想」というアイデアなど、わたしがぶつけた問いに確かな答えをもらったおかげで、その後わたしは何度も自分の思考のアクセルをおもいきり吹かすことができたのであった。

山極さんは京都大学の総長に就任してからすぐに、WINDOW構想（詳細は二三九ページ参照）なるものを発表した。このなかでもとくにWild（野生的）でNoble（高潔）な知性というところはとくに心がときめいた。今となれば、これが霊長類学研究者と哲学研究者との今回の対談テーマ「野生と都市の思考」の伏線になっていたのだとおもう。

数年前、たまたま相前後して、山極さんは総合大学の総長職に、わたしは芸術大学の学長職に就いた。だから教育についてもよくおしゃべりをするのだが、教育の補完的な科目としてではなく、教育全般の軸となる方法として〈芸術〉が、これからはとても大きな意味をもつだろうとの予感、というよりは確信を二人は共有している。これについても近々、対談することになっている。たっぷり刺激をもらいたいとおもっている。

第一章 大学はジャングル

大学の本来の使命とは

山極 私も二〇一四年に京都大学の総長になったこともあり、まずリーダーシップについて話したいと思います。大学の総長もリーダーだというわけで、もつとリーダーシップを発揮せよ、と国からは言われるのですが、どうにも違和感が拭えません。リーダーシップをどう考えるかは、本来なら各大学の理念に任されているはずで、鷺田さんは大阪大学で四年間総長を務められて、今度は京都市立芸術大学の学長になられた。大学トップのリーダーシップについて、どうお考えですか。

鷺田 国立大学は文部科学省や有識者会議などからの要請が何重にもあつて大変ですね。その点、今は公立大学なので、少し気は楽です。

山極 とはいえ国立大学の学長を四年間も務められたのだから、ほんとにすごいです。私は三年ほど経ちますが、就任してすぐにボロボロでした（笑）。企業は利益追求を目標として、社長の鶴のひと声のもとに社員が丸となって動けばよいでしょう。けれども教育機関は違う。教育機関は人づくりの場、つまり多種多様な人材の自己形成を手助けするところですから、総長が強権を発動する上意下達^{じょういげだつ}なんて合うはずがない。むしろ自発性を高めるには、ボトムアップで意見を吸い上げながら合意形成を図ることが必要でしょう。だか

ら総長は調整役に徹したほうがいいと思うのですが……。

鷺田 そのとおりです。私は阪大総長時代に、月一回、理事から部長課長、新人までの各職階から一人ずつ代表を集めてカフェ形式のミーティングをしていました。そこではただルールがあり、相手を役職名ではなく必ず「さん」づけで呼ぶ。ピラミッド型ではなくフラットな組織をつくるための試みでしたが、呼び方一つでその場の空気が明らかに変わるものです。

山極 いろいろな人がいて、好き勝手なことをする場が大学、これはある意味ジャングルのようなところだと思います。陸上で生物の多様性が最も高い場所がジャングルであるように、大学も多彩な人材が集まり多様な研究を自由に行える場であるべきでしょう。多様性を維持することがジャングルの安定性につながるものであり、そのためにはエネルギーと水、すなわち資金と世論の支えが必要です。外部の支援を引き出しながら、大学にいる猛獣のような研究者たちに縄をつけることなく、その能力を存分に引き出す。これこそが総長のリーダーシップではないでしょうか。

鷺田 まさしくそうですね。それにしてもジャングルとはいいたとえですね。大学本来の意義を突き詰めるなら、それは今この時代の国家的ニーズに応えることなどでは決してな

い。大学とは本来、国家や資本主義の市場論理などよりもっと根源的で、幅広い社会全体の仕組みの中で機能してきた組織です。そういう歴史の大きなスケールの中で大学を捉え直すべきです。要するに今の社会が行き詰まったときや国自体が大きく変容したときに、これまでは別の社会の仕組みをつくるための知的資源を蓄えておくこと、これこそが大学本来の使命です。目先の利益だけを追うような研究をしてはいかんと思いますね。

山極 おもしろい研究に生命を削るのが本来のあり方だと。

鷺田 まさにそのとおりで、世界中のあらゆる言語の構造を探究してみたり、物質の素性をミクロのレベルで考察してみたり、そうかと思えば宇宙の果てを突き詰めようとしたり……。今すぐに役に立つようなことや日常生活とはおよそ関係のないことを必死になつて研究している。それも私利私欲は一切抜きにしてです。傍^{はた}から見れば何の役に立つのかさっぱりわからないような研究に、どうして正月も盆もないほど必死に取り組めるんだろう、そう思わせてこそ本物です。

山極 ゴリラの家族形態の研究なんて、その最たるものです（笑）。ジャングルのたとえば戻ると、安定性は多様性が担保してくれるのです。だから、大学も多様な研究者がいることで、多様な知を集積できる。急激に移り変わっている政治・経済と対峙^{たいじ}して、大学が

存続していけるのは多様性を維持しているからでしょう。これまでの知が役に立たなくなつたときに新たな知を創造する。現実世界に役立つ知識だけでは、未来を生きたことはできません。未来をじっくり考えることが大学のミッション（社会的使命）だと思っています。

鷺田 大学が法人化されてから、大きく変わったのがミッションです。従来は研究・教育と言われていたのに、順番が変わって教育・研究となった。そこに社会貢献が加わって、今では三大ミッションとなったわけです。

山極 さらに、そこからの機能分化が求められている。

鷺田 しかも社会貢献と言いながら、この場合の社会とは企業だけのことを言っている。要するに産業・経済界でしっかり働ける、グローバルな人材を大学は養成せよというわけです。それと並行して産業技術のイノベーションや社会調査のために、企業から外部資金の供与を受けて産学連携で共同研究を進めなければならぬ。けれども、社会とは本来、企業だけではなく市民社会もあるはずです。たとえば社会で抱える汚染などの問題、あるいは食の安全性の問題、こういった問題についても大学はその実態調査や問題解決に乗り出さないといけない。だから社会貢献といっても、もっと広い意味で捉えなければいけません。

おもしろい研究だからこそ価値がある

鷺田　ところで、学生のころ「あいつ頭ええなと言われたら、馬鹿にされてると思え」と、桑原武夫先生が口癖のように言われていたと聞きました。「あいつはおもしろい」と言われて初めて褒められたことになるんだと。「おもしろい」とは、これまでの通説や、それらが依拠している基盤そのものを揺るがし、覆す徴候を見てとったときに発せられる言葉です。これに対して「頭がええ」とか「できる」というのは、今、流通している基準の中で測られた評価ではない。

山極　いかにも京大らしい話で、よくわかります。現世での利益など関係なく、とにかくおもしろい研究にひたすら切磋琢磨できる。とんでもないことでもじつくりと考えられる、そんな場が大学です。ジャンルが多種多様な遺伝子をストックする場であるように、大学はありとあらゆる知の貯蔵庫であるべきです。

鷺田　とんでもないことを言い出すやつを放逐したり、飼い馴らしたりするのではなく、あえて野放しのままにしておく場所ですね。その意味では、大学が引き受けるべき社会貢献とは、社会実験だと思えます。世間でいきなり採り入れたらリスクのあることを大学でやってみる。たとえば過激なフレックスタイムとか、とんでもない会議の進め方とか。今

度つくる京都市立芸大の新しいキャンパスでは、会議室をなくしてしまつて、会議は立つてやるようにしようかと企んでいます。オランダの提携校を視察に行くと、実際に会議室がなくて、会議は廊下のコーヒーコーナーみたいなところに集まつてきた人が、ぺちやくちやしゃべつて終わりでした。しかも、建物が四角錐を斜めにしたような形になっていて、屋根では植生の実験をやっている。こういう社会実験をできるのは大学だけだし、それをやることも大学の責任だと思います。

山極 大学がミニチュアモデルをつくつて実験し、うまくいけば社会に広げるというのは、いい考えですね。

鷺田 阪大時代には教養教育の改革を手がけました。教養といえば学部一回生で履修して、その後はひたすら専門的な研究に入っていく。でも、待てよと。大学院で博士号を取る前こそ、教養が最も必要になるのではないか。専門性を突き詰めた研究成果を現実社会で使うとなれば、本当にそれを使つていいのかどうか、あるいはどういう形で使えばよいのかを考えなければならぬ。博士号を目指している学生にこそ、教養教育、リベラルアーツが必要だと思いませんか。

山極 劇作家の平田オリザさんの演劇の手法を採り入れた講義や、鷺田先生自身もアーテ

イストと一緒に哲学の演習をされていたのは、そんな狙いがあったのですね。

鷺田 これもある種の実験です。おもしろいことは、教養につながり、芸術にもつながる。京大の「おもしろい」というのは、そこなんだと思います。これを僕はエクストラオーディナリー（並外れた）という言葉で表現しています。要するにオーディナリーな（普通の）世界の外側から、この世の価値観を検証する。芸術や音楽も同じで、絵も曲も、目に見えるものを通して見えない世界を見たり、聞こえる音を通して聞こえないものを聞く。このエクストラオーディナリーを大切にするのが京大の伝統だと思います。実は、「おもしろい」には必ず後づけがあって、「ほな、やってみなはれ」という言葉が続くのです。

山極 人の気を引くような、おもしろい提案をしないと誰も同意してくれない。ただし、一度同意してくれたら、それは信頼されていることでもある。だから突拍子もない発想を許容して、後押ししてくれる。これが京大の世界観なんです。

鷺田 サントリーなども創業者の鳥井信治郎さんの「やってみなはれ」の精神が企業文化として根づいていますね。そのルーツをたどれば、^{かみがた}上方の市民文化に行き着くのでしょう。

ゴリラから学ぶリーダーシップ

山極　ところで僕はリーダーシップをゴリラの社会から学びました。彼らのリーダーには、二つの魅力が求められます。他者を惹きつける魅力と、他者を許容する魅力です。ゴリラのリーダーは、仲間から担ぎ上げられてなるものであり、他者を力ずくで押さえつけるニホンザルのリーダーとは対極の存在です。

鷺田　僕も『しんがりの思想』（角川新書）の冒頭で、今や旧態依然としたリーダーシップなんてまったくのナンセンスだと書きました。みんながリーダーになりたがる社会ほどもろいものはないし、リーダーシップを持ってと言われてリーダーになろうとする人なんて、本来はリーダーにはまったく向いていないわけです。

山極　ゴリラの場合は「こいつをリーダーにしておく、分け前が増える」とか「こいつがリーダーならいろいろとよいことをやってくれるに違いない」と信頼されたり期待されるオスがリーダーに担がれます。自分がリーダーになりたいと宣言しても、みんなが納得してくれなければ、なることはできません。

鷺田　かつてIBMの会長がリーダーの仕事で「*getting things done by others*（人を^{たの}恃んで事をなす）」と言っていました。要するにリーダーとは、自分がいなくても、まわりがうまく動くようにセッティングする人のことだと。

山極 ゴリラの場合、メスはいろんな群れから来るから、血縁関係がなくてバラバラです。そんなメスたちを、リーダーの魅力で惹きつけておかねければならない。子どもたちを守るためには、子どもたちからも好かれていなければならぬ。すべてのメスや子どもは性格をきちんと心得た上で、必要な気配りを求められるのが、リーダーです。

鷺田 人の上に立って人を手足のように使う、そんなのは本当のリーダーではないですね。山極 リーダーはまわりの人の適性や能力を的確に判断し、チームワークを先導して目的に向かってみんなをまとめる。だからリーダー自身は目立たなくていい。ネットワークの中に組み込まれていて、ネットワークを動かす原動力になる人が、真の意味でのリーダーでしょう。「あれ！ 君がリーダーだったの？」と言われるぐらいでちょうどいいんです。戦いに勝つためにチームを引っ張り、その結果、目立つような存在はリーダーとは言えません。

鷺田 そのためにはメンバーの能力を把握しておく必要があります。人の意見を聞き、対話を通じて多様性を知り、いろいろな事態に対処できる知識を持っていることも必要です。山極 ただし、そんな能力は、教えようとしても教えることはできない。リーダーとはあくまでも自発的に育つものであり、育てようと思っても育てられるはずがない。大学にで

きることは、リーダーが育つための環境を用意することです。文系・理系を問わず幅広い教養を身につけるための場として、京都大学では博士課程教育リーディングプログラム「京都大学大学院思修館」をつくりました。

驚田 リーダーにアドバイスする人、縁の下の力持ちとなって支える人、前線でがんばる兵隊役の人などいろいろな人がいてはじめてチームは機能するものでしょう。みんながリーダーになりたがる社会ほど危ないものはない。リーダーというのは、誰もまだ見たことのない風景を見せてくれる人でもある。だから、リーダーシップの本なんかを読んで、こうすればよいのかと鵜呑みにしてやっている人は、従順な部下にはなれてもリーダーには絶対になれません。

山極 まさに『しんがりの思想』に書かれていたことですな。

驚田 今、先進国では軒並み人口が減って、社会が縮小し始めています。こんな状況は過去になかった。そういう時代のリーダーとして最も重要な資質が、「しんがりマインド」だと思うのです。しんがりとは、敗色濃厚になったときに、大切な人を先に逃がして、その人たちが安全なところにたどり着くまで、敵のいちばん近くで踏ん張る人のことです。

山極 山登りでもリーダーが最後尾につきますね。

驚田 いちばん強い人が最後尾にいて、いつも全体を見ている。二番手が先頭に立ち、最も弱い人がその次を歩く。そして先頭はその人の息づかいを背中中で聞きながらペースを決める。何かあったときには、最後尾のリーダーがすぐに駆けつけて、難を逃れる。社会が縮小するなかで、どうやって生き延びていくのかを考えるのが、これからのリーダーの役目。だから「しんがりの思想」が必要になるのではないでしょうか。

山極 縮小するのは、誰にとってもあまり喜ばしいことではない。けれども、そういう社会の中で生き延びていくためには、どうすればよいのか。情理を尽くしてビジョンを語れることが、これからのリーダーの資質でしょうね。

松下幸之助のリーダーシップはゴリラそのもの

驚田 僕はリーダーシップ論は一冊も読んだことがない。けれども、思いもかけない人の語った言葉が、記憶に焼きついていきます。松下電器（現・パナソニック）の社員から聞いた松下幸之助さんのリーダー論です。松下さんはリーダーの条件を三つ挙げたそうです。まずは愛嬌、これはゴリラにも通じますね。一つ目は運が強そうなこと、実際に運が強いかどうかはともかく強そうに見えることが大切だと。これもゴリラと同じでしょう。三つ

目が後ろ姿だということです。

山極　なんと！　ゴリラそのものじゃないですか。

鷺田　これに関して松下さんは理由を言わなかったらしい。そこで僕なりに解釈してみると、愛嬌は森の石松なんですわね。一本気でいつもまわりをハラハラさせるけれど、なぜか憎めない。まわりの人を、私が見ていてあげないと、という気にさせる。運の強そうな人といえど長嶋茂雄でしょう。彼も成功体験ばかりと思われがちだけれど、実は監督時代にチームは最下位になっているし、妙な形で辞めさせられたりと決して運は強くなかったけれど、強いと思わせるところがあつた。ただ、彼のそばにいるとなんだかすべてがうまくいきそうな気になるんです。

山極　確かに、よいリーダーのそばにいますと気が大きくなります。

鷺田　三つ目の後ろ姿は高倉健です。一人で仇討ちに行くときなども、彼は何も説明しない。黙って一人で出かける。その背中を見て仲間は何を心に決めたんだろうと察せずにはいられない。背中だけで、見ている人の想像力を掻き立てる。要するにまわりの人をアクティブな気分させる。ものすごくカッコいいリーダーです。

山極　この三つ、まったくゴリラそのものです。

都市と野生の思考
鷺田清一／山極寿一・著

発 行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定 価：740 円（本体）＋税
発売日：2017 年 8 月 7 日
ISBN：978-4-7976-8013-3 C0295

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)